

高等学校英語教育における ICT 活用の実践

学籍番号 159975

氏名 木村 翔音

主指導教員 寺嶋 浩介

1. 実践研究の背景

近年、国際社会で広がるグローバル化の波によって、わが国の教育に求められるものは大きく変化している。その中でもとりわけ重要視されているのが学校における英語教育の改革と拡充である。英語教育の在り方に関する有識者会議でまとめられた「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」では、第4の改革に教科書・教材の充実が掲げられ、デジタル教科書や音声を含む学習効果高いコンテンツの導入を進めていくとしている。しかし、OECDの調査によれば、日本の学校教育におけるICT活用は他国に大きな後れを取っているというのが現状である。このため、改革を具体化して現場で実践していくには大きな努力が必要となる。そこで、これからの英語教員には、ICTにより多様化・高度化される教材を最大限に活用し、それらを授業設計や指導に生かしていくことが期待される。加えて、生徒の学習意欲や学習到達度を考慮して一人ひとりの学習効果を高めるには、クラスサイズや授業のねらいに合わせたオリジナル教材の開発と運用も求められる。つまり、英語教員として教壇に立つ以上、ICT活用の実践を経験して知見を深め、望まれる役割を十分に果たしていくことが不可欠なのである。

2. 目的

本実践研究の目的は、生徒・教員にタブレット PC を一斉導入して教育活動を行う大阪府立のS高校において、英語科が推進するタブレット端末を使った学習指導に筆者が取り組み、ICTを活用した英語学習がもたらす効果と課題を探ることである。その結果をもとに、これからの高校英語教育における効果的なICT活用の可能性を見出すことをめざしたい。

3. 反転授業の実践

2年間で4回にわたる長期的な実習を行うにあたり、最初の実習ではICT活用の課題発見のため、実習校の実態把握に努めた。そこで近年話題になった学習方法のひとつである反転授業の実践が行われていることを知り関心を寄せた。しかし、反転授業による学習サイクルがうまく定着していないため十分な成果に結びついておらず、ここに改善の必要性を感じ実践に取り組んだ。実践では、既存のビデオに改良を加えた新たな教材の開発・授業に取り入れる学習活動に工夫を講じ、学習サイクルの確立をめざした授業設計を行った。具体的には、教科書の内容を応用したビデオ独自のコンテンツの作成とその内容を反映したグループ形態で行うミニ

クイズのアクティビティである。授業後に対象の生徒へのアンケートを実施し、ビデオ教材と授業活動がどのように機能したか評価した。アンケートの分析結果から、以下の3つのことがわかった。

- (1) ビデオに追加したリスニング活動への興味と関心で予習をする生徒が増えた。
- (2) 授業でクイズ活動を行ったことで生徒の授業理解度が向上した。
- (3) 授業でのクイズ活動が予習用教材への関心にもよい変化をもたらした。

一方で、依然としてビデオによる予習を行わない生徒の割合が高かったことから、学習意欲の向上につながる授業方略を考えることが課題として残った。

4. Kahoot!を用いた授業の実践

反転授業の実践で浮き彫りとなった課題を受け、授業内で生徒の学習意欲を高められる手立てを取り入れることが重要であると考えた。この実践では、ゲーム性の高い学習が動機づけに良い影響を与える点に着目し、オンライン学習プラットフォーム「Kahoot!」を用いた授業を行った。活動の効果の検証は生徒への事後アンケートにより行い、自己決定理論において内発動機づけを高めるとされる3つの心理的欲求（自律性・有能性・関係性）を通常授業時のものと比べて評価した。この実践で得られた結果は以下のとおりである。

- (1) 対象としたすべてのクラスで、3要素のうち有能性と関係性が大きく上昇した
- (2) 科学科のクラスでは自律性の向上も見られた
- (3) 学習内容のふり返り・自己分析を行う生徒が見られ、メタ認知に影響する可能性が示唆された

活動の課題として、今回行った活動形態では、自律性の心理的欲求を充足するには授業設計が不十分であったことがあげられる。また、現時点でのICT環境では機器の接続トラブルが頻発したことも将来的なハード面の充実に向け改善していかなくてはならない点である。

5. 課題と展望

次期学習指導要領ではアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業と指導の充実が叫ばれる中、本実践研究では、この視点にかなう授業活動を取り入れた英語学習の指導を試みた。英語教育改革でも言及されるデジタルコンテンツやICT機器の活用にも裾を広げ、授業改革の新たな切り口を提示できたのではないかと考えるに至った。しかしながら、新たな時代の教育的手段を現場に浸透させるためには、従来の授業観からの転換が不可欠であることも申し添えておきたい。現時点での課題は、実習校の教員集団のような研究開発に熱心な先生方、筆者のような特定の分野に強い関心を寄せる者の間でしかアイデアが共有されていないことである。将来、本実践研究で培ったICT活用と授業実践のノウハウを各所で伝え広めていく先導的な役割を自分が果たしていきたい。また、今回の実践研究では行えなかった継続的な学習効果の評価に関しても、赴任先の高校において今一度、本実践の授業設計デザインを生かした取り組みを考えていきたい。筆者の今後の実践と研究が未来の学校教育を彩る一助となれば幸いである。